

平成24年度 春日部共栄中学校

第1回 入学試験問題

国 語

(50分, 100点)

受験についての注意

1. 試験開始の合図があるまで、問題用紙を開かないでください。
2. 問題は ㊦・㊧ の2問です。
3. 解答は解答用紙（別紙）の所定の欄^{らん}に記入してください。
4. はじめに受験番号、氏名を解答用紙に必ず記入し、最後にもう一度^{かくにん}確認してください。
5. 〈＝ 〉は直前にあることばの説明です。
6. 解答用紙のみ回収します。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

子供はいつまでも子供のままではいられないから、どこかで断念して、もう自分は子供ではないと、はっきり認識しなくてはならないときがやってくる。そのときは、奈落の底へⅡ物事のどん底Ⅲに突き落とされたような断絶を味わうけれど、でもそのこと¹で別の生き物に生まれ変わるんですね。この先どうしようかと真剣に考えて、新しい幸せを目指し、新しい人生を自分の力で歩み始める。

〈Ⅰ〉ところが、子供が子供のくせに中途半端に大人気分で、「大きくなったら開業医になるんだ」とか、「やっぱり東大法学部だ」なんて言ってるようでは困るんです。「電車の運転手になりたい」とか「宇宙飛行士になって宇宙に行くんだ」とか言ってるほうが未来がある。なぜかという、大人化した子供は実際に大人になっても子供時代との断絶がない。子供から大人にジャンプできなくて、子供のまま子供化した大人になっていく。いま世の中にたくさんいるのは、こうした子供大人です。

〈Ⅱ〉遊びの特徴のひとつだった、ほかのことを忘れて集中するという、その集中力がないんですね。情報に左右され、親に左右されて、手段としての仕事の中にずっと居続けることができない。その外側にすぐ出てしまおうとする。行動が断片化していて、自分の行動を組織化することができないんです。

しかも、仕事そのものの変化がそうした状況をさらに加速させている、という面もありますね。昔は知的労働のホワイトカラーと肉体労働のブルーカラーの二つのタイプの仕事^①があつて、マルクスへⅡドイツの経済学者Ⅲも言ったように、ブルーカラーは

【A】した単純労働であり、ホワイトカラーはトウゴウ^②された複雑労働のはずだった。

ところが、最近ではブルーカラーの仕事の大部分を機械がダイコウ^③するようになり、ほとんどの仕事^④がホワイトカラー的な仕事になっている。しかも、トウゴウされていたはずのホワイトカラーの仕事の【A】が進んで、知的能力に関係なく誰でもできるような仕事が多くなり、ホワイトカラーのプロレタリアへⅡ賃金労働者Ⅲが、あらゆる職場で大量にあふれることになったんです。ホワイトカラーの職がどんどん地盤沈下を起こして、いまや彼らから仕事全体を見通す感覚は失われてしまっているでしょう。そうになると、仕事はやらなければならないからやっている、というだけのもので、いったい何のためにやっているのかはよくわから

ない。これがいまの一般的な労働者の心の風景なのではないでしょうか。

〈Ⅲ〉そうすると、仕事場は、できれば逃げ出したい場所でしかなくなる。その気持ちを紛らすために、外でいろいろなことをするけれど、次の日にはまた仕事場に舞い戻らなくてはならない。毎日はその空しいくり返しになっていく。

そういう人たちの特徴は、B ということですよ。自分の仕事を自分で組織できないから、言われるまで何もしない。遊ぶにしても、集中力がないからひとり遊びができない。チームワークの能力もないから集団遊びもできない。その結果、一人でもいられず集団の遊びもできないので、大勢でなんとなく群れているという状態になるんですが、群れていても何をするわけでもない。ただ群れていて、解散しても群れていたいものだから、お互いに連絡を取り合って、同じ群れだということを確認し合うことになる。

女子高生に共通する外見的特徴、茶髪だとかルーズソックスだとかいうもののひとつの役割は、同じ群れであることの証明なのです。そして、プリクラと一緒に撮り、ポケベルや携帯電話を持つのは、自分たちが連絡を取り合っていることの証明。ある群れに属していることを示さなくてはいけないという、一種の強迫カンネン^④が彼女たちを縛っていて、これらは、まさに遊ばないまま大きくなった子供の特徴だと思います。彼らが労働者になれば指示待ち人間になり、親になればとんちんかんな教育をして、同じように大人になれない大人を作り出していくことになるでしょう。

〈Ⅳ〉それでも彼らはそれなりに充足しているのかというと、けっしてそんなことはないんです。

こうした状態は、本人たちを苛立たせる。だって、何が幸せなのか、自分でイメージできないんですからね。もちろんテレビドラマやいろいろな情報の中には、絵に描いたような幸せや、幸せとされるものがあふれています。ブランド品に社会的ステータスへ地位、いろいろありますが、ただ、情報には必ず裏情報というものがついてまわるんです。あれほど立派でステータスのあった人が、実はハチャメチャな私生活を送っているとか、憧れのスタイルを自慢していたスターが、実は拒食症で死んでしまったとか。どんなに幸せな情報にも裏情報があり、素直には信じられないような構造になっていて、じゃあ、いったい何が幸せなんだろうかと、途方にくれているのが現実だと思います。

すると、普通に得られる情報の外側に、自分を幸せにしてくれる本当の何かがあるはずだと、信じた気持ちが起こってくる。

これが、いま非常に多くの^⑤の人たちに見られる現象ですね。彼らは焦っている、現在の自分と切り離されたどこかまったく別な場所に、幸せがあると考えて。そうすると、その幸せを求めて、現在の自分からジャンプしないといけなくなる。人格改造セミナーにしろ海外留学にしろ、いま人びとをとらえている幸せのイメージには、現在いる場所からジャンプする点に特徴があるんです。この情報化時代、幸せは現在からの連続性の中で着実にキズけるものだと、なかなかイメージできなくなっているんですね。

(橋爪大三郎『幸福のつくりかた』より)

問一 ―部①⑤のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

問二 部1「そのこと」が指示する内容を二十五字以内で答えなさい。(句読点も字数にふくみます)

問三 部2「子供のくせに中途半端に大人気分で」いるものを、筆者は何と言っていますか。問題文中から七文字で抜き出して答えなさい。

問四

A に共通して入る適当なことを、問題文中から漢字三字で抜き出して答えなさい。

問五 くく部3「そういう人たち」の説明としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 仕事をできれば逃げ出したい場所としか思えなくなってしまった人たち。
- イ 誰でもできる仕事しか与えられず、仕事全体を見通す感覚を失ってしまった人たち。
- ウ 知的労働者のつもりでいたが、実際には肉体労働に疲れ果ててしまった人たち。
- エ 仕事を義務感でしかこなせずに、仕事の目的を見いだせなくなってしまった人たち。

問六 B に入る適当なことを、問題文中から四字で抜き出して答えなさい。

問七 くく部4「まま」と異なる用法をふくむ例文を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人生は君の思うままにはならないこともあるんだよ。
- イ 覚えていたはずの漢字を忘れてしまうことがままあるんだ。
- ウ 雨が降ってきたのに洗濯物は干したままなんだ。
- エ 友だちに昨晚の火事の様子を、見たままに話した。

問八 問題文中には次の一文が抜けています。〈I〉～〈IV〉のどこに入れるのが適当ですか、記号で答えなさい。

【こういう大人は、堪え性がなくて、仕事に徹してその道の修練を積むという発想がない。】

問九 くく部5「多くの人たち」と「筆者」が考える「幸せのイメージ」の違いを、六十字以内で説明しなさい。(句読点も字数にふくみます)

二

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

年が明ける前から、緊張していた。なにをしても落ち着かず、息苦しくてしかたなかった。クラスの友だちに端から電話をかけて「選挙、誰に入れるの？」と聞いてみたかった。

でも、それがみつともないことだというのは、少年にもわかっていた。がつついてるんだと勘違いされて、「なんだよ、おまえ当選したいの？」なんて言われたら、恥ずかしくて、悔しくて、もう学校へは行けなくなってしまうかもしれない。

学級委員になりたいわけではない。ほんとうだ。嘘なんかついていない。本気の本気で、学級委員なんて面倒なただだ、と思っている。

「あんなの、ただの雑用係だもんな」

少年は、同じ団地の紺野くん^{こんの}に言った。冬休み最後の日、二人でゲームをしているときに、いきなり。

「あんなのって、なにが？」

「学級委員だよ」

ああアレね、と紺野くんは笑った。その笑い方が気に入らず、少年は「さっき言っただろ、ちゃんと聞いてるよ」と 1 をとがらせた。

紺野くんは「そうだっけ」と笑って、「でも、学級委員って、いいじゃん」と軽く言った。

「よくないよ」

「そう？」

「だって、学級会の司会もしなきゃいけないし、児童会にも出なきゃいけないし、あと、昼休みの放送もあるし……」

「カッコいいじゃん」

「よくないって」

少年はコントローラーをソウサ^①する手を速めて、紺野くんのカートをヘアピンカーブから谷底に突き落とした。「あつ、あつ、

あーっ……」と自分まで一緒に床にひっくり返った紺野くんから顔をそむけ、「俺、絶対になりたくないから」と言った。
紺野くんは床に転がったまま、「どうせならないうって」と、また笑った。

「だよなーっ」

調子を合わせて笑い返ししながら、少年はあらためてクラスの男子の面々を思い浮かべた。

学級委員は各学期に男女二人ずつ。去年までは男女一人ずつだったが、新しく赴任した校長先生の「一人でも多くの児童にクラスのリダーの責任感とやりがいを与えたい」という方針で人数が倍に増え、立候補も再選も「なし」になってしまった。

なんだかなあ、いつも思う。中途半端だよそんなの、と文句を言いたい。学級委員をまじめな子にドクセンさせたくないのなら、日直や給食当番みたいに順番でみんなにやらせればいい。それができないのなら、いままでもおり男女一人ずつにしておいてくれたほうがずっと気が楽だ。

クラスの男子は十七人。学級委員は、そのうち六人。三分の一は委員になる計算だ。これ——けっこうキツイ。去年までのように年間三人の委員なら、みんなが認めるベストスリーがすんなりと当選する。でも、六人になって、しかも三学期になると

2 の背比べだ。十七人中の五番めと六番めで選ばれたって自慢にはならないし、そのくせ選ばれなかったら、ベストスリーからはずれるよりずっと悔しい。

「あ、でも……」紺野くんは少年を振り向いた。「学級委員、なっちゃうんじゃない？」

「俺？」——声が裏返りそうになった。

「うん、だって、他にもう学級委員やれそうな奴っていないじゃん」

「そんなことないって、なに言ってるんだよ、まだたくさんいるよ」

あいつだって、こいつだって、と思いつくまま名前を挙げていった。

でも、少年は知っている。勉強でもスポーツでも遊びでも、自分の位置は、十七人の真ん中よりちょっと上。七番とか、八番とか……九番までは落ちないと思うし、もしかしたら六番とか、意外と五番とか……。

「俺は当選すると思うけどなあ」

うらやましそうに言う紺野くんは、少年のランク付けではクラスの最低。気はいい奴でも、トロくて、勉強もスポーツも全然だめで、顔もよくない。一学期も二学期も、一票も入らなかった。

マジ、俺、当選すると思うぜ、と紺野くんがつづけるのをさえぎって、ゲームをリセットした。「早くやろうぜ早く」とゲームに戻り、あとはもう選挙の話はしなかった。

紺野くんが帰ったあと、急に胸がむしゃくしゃしてきた。自転車で町じゅうを走り回っても、まだおさまらない。

学級委員なんてなりたくないのに、学級委員に選ばれたい。できれば当選したあとで「俺、絶対にやだから」と断ってみたい。

一学期の選挙では二票しか入らなかった。二学期の選挙では六票に増えた。クラスの「上」の四人が抜けた今度の選挙では……

1 「上」って発想、やだな、なんか。

人気者になりたい——のとは、違う。勝ち負けというのとも、微妙に、違う。

ただ、どきどきする。むしゃくしゃする。胸の奥で小さな泡が湧いて、はじけて、また湧いて、はじけて……。

俺だけなのかなあ、とつぶやいた。

こんなことかながえてるのって、クラスで俺だけ、なんだろうか。みんなはもって余裕で、全然楽勝で、へっちゃらで、選挙のことなんてなにも気にしていない、のだろうか。

こんなことを考えてる俺って、じつは死ぬほどヤな性格の、ヤな奴、なんだろうか。

四年生の頃には思わなかったことだ。たぶん。三年生の頃だと、選挙の前にこんな気分になってしまっなんて、想像すらできなかった、と思う。二年生や一年生の頃のことは、もう思いだせない。

始業式の前の教室は、ひさしぶりに顔を合わせた友だち同士のおしゃべりでにぎわっていた。誰も選挙の話はしない。忘れている？ どうでもいいから話さない？ それとも、みんなも緊張しているから、わざとその話題に触れないようにしているのだろうか。

少年はお年玉やゲームの話題に付き合っておしゃべりしながら、注意深くみんなの様子をうかがった。特に、五番めと六番めの座を争いそうな梶間^{かじま}くんと榎本^{えのもと}くんを。

二人がちよつとでも学級委員をやりたいがっていたら、すぐに「カジとエノちゃんが三学期の委員だよ、決まりだよ、なーっ？」とみんなに言うつもりだった。そのときのクチ^③ヨウや表情の練習も、頭の中で何度も繰り返し返していたのに、二人がなにを考えているかは最後までわからずじまいだった。

体育館での始業式が終わり、教室に戻ると、担任の間宮^{まみや}先生が「今日の『終わりの会』は三学期の学級委員の選挙にします」と言った。

どきどきしたままで、むしゃくしゃしたままの胸が、息ができないほど締めつけられた。列ごとに配られた投票用紙を後ろに回すとき、指がかすかに震えた^{ふる}、ような気がした。

投票するのは、男女二人ずつ。

「好き嫌いや人気投票じゃなくて、クラスにとって誰が委員になってくれたら一番いいのか、よく考えて投票しなきゃだめよ」ふだんはスウェット姿がほとんどの先生が、今日は始業式だからスカートとジャケット姿——それだけでなにか、いつもは優しい先生が急に厳しく^{きび}なったように見える。

少年は投票用紙に向かった。女子の委員は最初から遠藤さんと矢口さんに決めていたのに、名前を書くときにシャープペンシルの芯が折れてしまった。

男子は——最初に梶間くんと榎本くんの名前を並べて書いて、梶間くんを消して、紺野くんの名前に書き換えた。だってあいついい奴だもん、トロイけど優しいし、三学期になってもゼロ票ってかわいそうだし。

深呼吸をした。榎本くんの名前も消した。顔を伏せ、両手で壁^{かべ}をつくって、小さく切ったわら半紙の投票用紙を隠した。シャープペンシルを素早く動かして二人めの名前を書き終えたら、すぐに紙を折り畳^{たた}んだ。

自分の書いた字は見なかった。読まなくてもわかる。いままでに数えきれないほど書いてきて、これからも数えきれないほど書

いていくはずの名前だった。

開票が始まった。

三枚めの投票用紙で初めて少年の名前が告げられた。「正」の字の上の横棒が黒板に記された。「なんでだよお、誰が入れたんだよ、バカ、なに考えてんだよお」とうっとおしそうに声をあげたら、先生に「開票中は静かにしなさい」と注意された。

また少年の名前が出てきた。「二」に縦棒^{たて}が加わって、ほどなく三票めも入った。

でも、そのジテン^④ですでに榎本くんは「正」の字を完成させていたし、もっと速いペースで票を伸ばしていた梶間くんは、二つめの「正」も残り二票でできあがる。

「カジとエノちゃんでもいいじゃん、もう決まったようなもんじゃん、コールド勝ちじゃん」

椅子^{いす}の前脚を浮かせて言うと、先生に「私語をしないの」と名指しで叱^よられた。

開票は後半に入った。順調に票を伸ばした梶間くんの当選は確実だったが、二人めの委員は榎本くんと少年が抜きつ抜かれつだった。

投票用紙が残りわずかになると、榎本くんもそわそわしはじめ、「俺、やりたくないって言ってんじゃん」「だめだって、俺、学校やめるから」と無駄口^{むだぐち}が増えてきた。うるさい。耳障りだ。少年は小さく舌打ちした。さっきの俺も、アレと同じだった？もう一度舌打ちをして、空あくび^{から}をして、あと一票で完成する三つめの「正」から目をそらしたとき、紺野くんの名前が読み上げられた。

初めての得票だった。「紺野」の下に、「正」の横棒が一本。教室のどこから、くすくす笑う声が聞こえた。やだあ、と女子の誰かの声も。

同じ投票用紙^②に書かれたもう一人の名前も、読み上げられた。

少年の、三つめの「正」ができあがった。

少年は当選した。十五票。榎本くんとは一票差だった。「ちえっ、一瞬期待^{いっしん}して損したじゃんよお、カッコ悪ーう！」と榎本く

んは甲高い声で言つて、両手をおどけてひらひらさせた。頬が赤い。教室じゅうを見回してるのに、誰とも目を合わせていない。少年の頬も赤かった。誰とも目を合わせず、黒板に並ぶ「正」やできかけの「正」をじつと、にらむように見つめていた。エノちゃんもおんなじだったんだ、と思った。あいつも俺とおんなじで、胸がどきどきして、むしろくしゃしていたのかもしれない。ほんとうはカジだって、他の奴らだって、おんなじだったのかもしれない。

「じゃあ、委員になったひとは前に出て、一言ずつ挨拶してください」と先生が言った。

女子の二人と梶間くんが遅れて、少年はのろろと席を立った。当選して断るなんて、やっぱりできない。そんなの最初からできるわけなかったんだよバーカバーカ、死ぬバーカ、と自分をなじった。

うつむいて歩きだしたら、紺野くんの顔がちりと目に入った。結局一票だけで終わった紺野くんは、こつちを見て、やったね、というふうに笑っていた。三つの「正」の中には、紺野くんが入れてくれた一票も含まれているのだろう、きつと。

少年は梶間くんたちと並んで黒板の前に立ち、みんなと向き合った。榎本くんを見られない。もしかしたら字の書き癖で……と思うと、怖くて、先生のほうも向けない。選挙が終わった瞬間には荷物を下ろしたように軽くなった気分が、いまはまた重い。さっきよりずっと重くて、苦くて、悔しくて、悲しい。

梶間くんは「三学期は短いけど、一所懸命がんばるから、みんなも協力してください」と胸を張って、大きな声で挨拶をした。少年は横を向いて、「ぼくも同じです」とだけ言った。

「それだけ？」

先生の声に、思わずひるんで振り向いた。先生は窓を背にして立っていた。外の陽射しがまぶしくて顔がよく見えない。

「当選したひとは『正しい』がたくさんあったんだから、挨拶も、きちんと、正しい挨拶にしないさ」

意味のわかった何人が笑った。少年にもわかったから——逃げるように正面を向いた。

榎本くんはもうふだんの調子に戻って、隣の女子の浅井さんと小声でおしゃべりしていた。紺野くんもいる。挨拶のあとの拍手に備えて、相撲の土俵入りみたいに手を開いて、少年と目が合うと、すげえーっ、カッコいい、と口だけ動かして、また笑った。

少年は目をそらす。気をつけをして、軽くつま先立って、息を吐きながら踵を下ろした。いつか先生に教わった、緊張しないで挨拶をするときのコツだ。

「ぼくも……一所懸命、がんばります」

ちゃんと言えた。

「よろしく願います」と頭を下げると、先生が「はい、新しい学級委員に拍手」と言った。みんなの拍手に包まれると、急に胸が熱くなって、涙が出そうになった。

「じゃあ、みんなはこれで下校です、学級委員の初仕事、黒板の字を消してください」

教室は椅子を引く音やランドセルの蓋を閉める音やおしゃべりの声で騒がしくなった。

黒板消しを手にした少年は、まっさきに自分の名前と三つの「正」を消した。次に、紺野くんの名前を消し、「一」を消した。榎本くんの名前の前に立って、あと一本あれば完成していた三つめの「正」の、ほんとうなら最後の横棒が入っていたところをしばらく見つめてから、名前と「正」をまとめてひと拭きで消した。

先生に名前を呼ばれた。軽くてやわらかな、歌うようなクチュウだった。

振り向くと、さっきと同じ場所に立っていた先生は、「学級委員の仕事、しっかりがんばりなさいよ」と笑った。

少年は黙ってうなずいた。笑い返したかったが、頬の力を抜いたら、違う顔になってしまいそうだった。

教卓のそばまで、紺野くんが来た。「終わったら、一緒に帰ろうぜ」と少年に言った。

今度なものにも応えられなかった。黒板に向き直って、自分の名前があった場所を、また黒板消しで拭いた。何度も何度も拭いた。書記をつとめた日直の藍原くんがよほど強く書いたのだろう、三つめの「正」は、どんなに拭いても、いつまでもうつすらと跡が残っていた。

問一 部①～⑤のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

問二 1 に入る適切なことばを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 指先 イ 髪の毛 ウ 唇^{くちびる} エ 鼻

問三 2 に入る適切なことばを、ひらがな四字で答えなさい。

問四 部1「上」って発想、やだな、なんか。」と少年が感じた理由として、適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 三学期になった今なら選ばれる可能性が高いと思ってしまいう自分を計算高いと感じたから。
イ お情けで選ばれたとしても、それでは自分がみじめな思いをするだけだと感じたから。
ウ 学級委員の仕事は心底いやなのに、選ばれたいと思っっている自分に割り切れない思いを感じたから。
エ 平等であるべきクラスの仲間を順位付けすることで、人間を差別しているように感じたから。

問五 部2「同じ投票用紙」は誰のものだと考えられますか。適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 少年 イ 遠藤さん ウ 紺野くん エ 榎本くん

問六 部3「のろのろ」とは異なった性質をもつことばとして、適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 彼のてきばきとした仕事ぶりには感心した。
イ 激しい雨にくわえて、風もびゅうびゅう吹き続けている。
ウ 冬も終わりに近づき、ぽかぽかした陽射しに春を感じる。
エ 合格発表の日が楽しみで、今からわくわくする。

問七 部4「……」に省略されていると思われることばを二十字以内で答えなさい。(句読点も字数にふくみます)

問八 部5について「笑い返したかった」少年の気持ちと、「違う顔」とはどんな顔なのかを、まとめて六十字以内で説明しなさい。(句読点も字数にふくみます)

問九 問題文には「」というタイトルが付けられています。 に入ることばを問題文中から漢字一字で抜き出して答えなさい。

（国語）

[illegible]

問三

問四

問五	
問六	

問七	
問八	へ ゝ

[illegible]

問一

問二

問四	
問五	
問六	

[illegible][illegible]

問九	
----	--

受験番号	
氏 名	

得点